

はじめに

世界では最終的な事はまだ何ひとつ起こっておらず、世界の、あるいは世界についての最終的な言葉はいまだ語られておらず、世界は開かれていて自由であり、一切はまだ前方にあり、かつまたつねに前方にあるであろう。

(ミハイル・バフチン『ドストエフスキイの創作の諸問題』)

私の軍記への興味は、それを読むことに何の意味があるのかということに尽きる。そのため、軍記がどのような構造や表現を持つか、かつての人々はそれらをどのように受容したのか、そして今軍記を受容する私たちにそれらはどのような意義を持ちえるのかをずっと研究のテーマとしてきた。

旧著『軍記と王権のイデオロギー』では、軍記の歴史叙述が王権への反逆者の物語を装いつつも、訪れた危機から必ず回復する王権の絶対性を教育する物語となっていることを示した。(『物語としての歴史』)が、共同体の正当(統)性を語るものである以上、それはごく自然なことである。誰かが意図してそう書いたと

いうわけではなく、書いてみたらそうなってしまふのである。

戦後、軍記は武士による階級革命を描いた叙事詩、あるいは叙事詩的物語であるというロマンティックな言説が流布し、二十一世紀になってもそれが明確に否定されることがないという状況に疑問を感じてのことでもあった。軍記は、革命的ではなく保守的である。もちろん時代によって、共同体の正当（統）性を保証するものは天皇王権ではありえなくなりもするが、ある権力の危機と回復の物語であることは間違いがない。その認識の上で、私たちは軍記にどのように対峙すべきなのかを論じた。

しかし、旧著でも断っておいたが、〈王権への反逆者の物語〉Ⅱ〈王権の絶対性の物語〉というのは基本構造であって、それだけで軍記のすべてを語りつくせるわけではもちろんないし、軍記を読むという営為が王権・権力の絶対性を学ぶという体験だけに終わるはずもない。

本書では、旧著で論じ切れなかった軍記の構造、表現と、それを読むことの意味について不十分ながらも論じたつもりである。

不思議に思うのだが、戦闘という暴力を扱ったテキストでありながら、軍記が暴力によって引き起こされた惨劇をどのように描いているのかについて正面から論じ

た研究は少ない。現象の分析だけではなく、なぜそのような表現になるのか、それを私たちはどのように了解すべきなのかということまでをも論じたものはさらに少ない。「第一部 いくさの表象」では、この問題について考察した。

『平家物語』は、親子や夫婦や主従の愛を語る物語であるとよく言われる。「第二部 愛の表象」では、家族の愛の物語を分析し、その背後にあるイデオロギー、それらを読むことの危うさと可能性について論じた。

『平家物語』が、物語として最も優れた軍記であることに間違いはない。だから私たちはともすると、『平家物語』の歴史叙述のあり方を軍記の典型として思い描きがちであるが、異質な世界観を持つものもある。「第三部 知の様相」では、慈光寺本『承久記』と『太平記』を取り上げ、その独特の物語世界が私たちにどのような意味を持ちえるのかを論じた。

「第四部 英雄の誕生」では、近代における受容の問題をとりあげた。これについては拙著『平家物語の再誕——創られた国民叙事詩』でも詳しく論じ、それと重なるところもあるのだが、本書では英雄像に焦点を当て、軍記の英雄たちが明治から昭和戦後にいたる近代社会においてどのように認識され表象されたのかを概観した。私が近代の受容にこだわるのは、現在の私たちの軍記への理解が近代のそれに強く

拘束されているからである。

『平家物語』は国語教育において、明治以降ずっと定番教材である。「第五部 教室の『平家物語』」では、学校教育で『平家物語』を扱うことの危うさと可能性について論じた。教材としての『平家物語』に興味を持つのは、その時代の『平家物語』についての「常識」がそこに反映しているからである。そしてこれからもこの物語についての「常識」の形成に力を持つであろうと思うからである。教科書や教師用指導書は、『平家物語』の受容と活用について考える上で、貴重な資料の一つである。私が研究を始めた一九七〇年代の終わりのころ、すでに軍記の批評的研究など時代遅れであった。そして今や批評という言葉は、軍記研究において「死語」である。批評のない文学研究など何の意味があるのかなどと思っている私などは、「変わり者」であろう。しかし、研究の目的と対象によつては批評精神が必要になる。軍記研究にはそれがとりわけ必要であるはずだ。たとえばすでに触れたように、軍記を考えることは人間にとつて忌むしくも根源的で魅力的な暴力について考えることでもある。それは軍記を研究するものの特権であるし責務でもあると私は考える。その遂行のためには批評することへの意思が絶対に必要なのだ。もちろん、そんな研究は「国文学」には必要ないという「禁欲的美学」を尊重はするが、それは人文科

学の醍醐味の一つと、責務の一つとを自ら放棄する行為であると私には思われる。

軍記の、いわゆる「作品論」とされる研究は、現在世に出ることが少ない。特に『平家物語』などは、曲がりなりにも百年以上研究が続けられてきたのであるから、言うべきことが尽きたという感もある。卒業論文に『平家物語』を選んだ学生は、だれもがこの事実困惑する。

軍記というテキストに新たな問いと答えと価値を発見するためには、批評する意思を持つ者が新しい知恵と方法を身に着け、それを試みなければならない。過去の遺産であるテキストは変わりようがない。ならば、研究者が変わらなければならない。軍記から学ぶべきことはまだあるはずだ。軍記というテキストの持つ可能性を、「前方」へと開かなければならない。それを試みる研究者が現われ、そのような研究を受け入れる環境が整うことを願う。